荷を負うアイヌの姿

――菅江真澄の絵から――

菊　池　勇　夫
KIKUCHI Isao

はじめに

菅江真澄の文と絵は近世後期の東北・北海道の生活文化について豊富な材料を提供してくれる．真澄の日記等に書きとめられた事柄から問題を発見し，それを他の史料によって裏づけし論を組み立てるという手法を，これまで多少とも試みてきた．しかし，真澄の絵についてはまだ直接扱ったことはない．真澄の絵はどのように歴史・民俗の研究に生かせるのか，このたび機会が与えられたので，不十分ながら事例的な検討を行ってみようと思う．

シャモ振の荷の負い方――真澄の絵①――

今回取り上げるのは，荷物を負って歩くアイヌの姿が描かれた2つの絵（図①・②）である．『菅江真澄全集』第2巻口絵（未来社，1971年），および『菅江真澄民俗図絵』上巻（岩崎美術社，1989年）に掲載されている．図①は「蝦夷喧辞辯（えみしのさえき）」の挿絵で，絵に「アキノシヤモぶりにものおひてやまち行のかた」との説明がつけられている．「蝦夷喧辞辯」は，真澄が寛政元年（1789）に松前城下（福山）を出発して，渡島半島を日本海沿いに北上し久遠郡にある太田山に参詣したときの往復の日記である．真澄がアイヌと直に接する最初の旅となった．図①に対応する本文は，太田山参詣の帰路，5月7日の平田内から熊石までの道筋，奥尻島を沖に見ながらの，次の箇所かと思われる．

> 弓（グウ）をかしらにかけ，こもつゝみのおもげなるに毒箭医（イカキフ）をそへて，おひもたるアキノの行を，さちなるあない，あらくまのおそれもあらじ．かれに行末をとへば，まづ寄木宇多，カイドロマ，……熊石と手ををりをり，シヤモこと葉かよふアキノのかたりもて浜路をゆき，いはむらをわたり谷にくだり，たかねをわくれば桜咲たり（『菅江真澄全集』第2巻41頁）

この文章の後に，超山法師（出羽村山郡の人）と別れたと書かれているから，真澄と超山はそれまで同道していたのであろう．真澄は平田内でこれから先の山中には羆（ヒグマ）が出ると聞いていたので，弓矢を持つアイヌと一緒になったのは道案内ともなり，荒熊の恐れもなくなって幸運であったと述べている．弓を頭にひっかけ，重そうな菰包みに矢の入ったイカキフ（矢筒・イカヨッ）を添え背負っていると書かれているアイヌの姿は，まさに図①のものと合致する．背負っている荷はよく見

図１「蝦夷喧辞辯」（『菅江真澄民俗図絵』上巻，岩崎美術社）

図２「蝦夷酒天布利」（『菅江真澄民俗図絵』上巻，岩崎美術社）

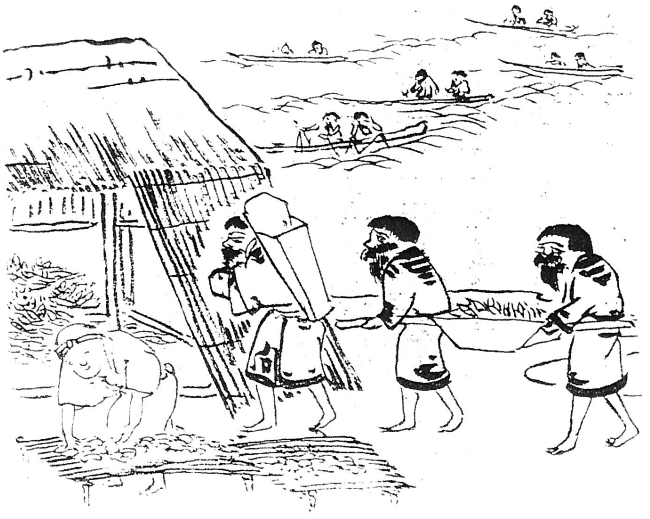

図３「蝦夷山海名産図会」（『松浦武四郎選集』2，北海道出版企画センター）

ると二つあり，菰包みと矢筒に相違あるまい．

絵には文章では書ききれていない具象性がある．図①でいえば，アイヌ人物に関しての，髷を結わない散髪の髪形，立派に蓄えられた長い髭，樹皮製のアットゥシと思われる衣服，衿の合わせ方が下部から左前のようにみえる衣服の着方，裸足，そして右手に何やらぶらさげて持っている（後述），といった諸々の情報である．衣服に文様がないなど，描き込みが省略されているところもありそうだが，ごく一般的なアイヌの成人男子の姿を表現していると捉えてよいものである．

だが，この図①で明らかにアイヌの文化規範を逸脱しているのは，図の説明にあるように，荷物の負い方がアイヌのそれではなく，シャモ振（和人風）であるという一点である．確かに胸の部分で荷を負うための紐が交差しているように，肩・胸で荷を支持している様子が描かれている．わざわざ真澄が描いたのは当時稀な例であったからだろうし，図①の人物についてシャモ言葉がわかると書いているから，シャモ振にまねぶところがあったのかもしれない．松前地に近い口蝦夷地では和人と接触の機会が多いという地域事情も関係していよう．

図①のようなシャモ振の背負い方をしたアイヌの絵は少ないようである．目に入ったのでは，松浦武四郎「蝦夷山海名産図会」所載の図③があり，肩に負い紐が懸かっている（『松浦武四郎選集』2，229 頁，北海道出版企画センター，1997 年）．同人の「西蝦夷日誌」第貳編にも同じ絵が掲載されている．肩で負っているのはニシンを沖上げしたとき運搬するショイモッコと呼ばれる木製の背負いもっこである（『留萌市ニシン漁撈調査報告』留萌市，1995 年，など）．鯡漁場で請負商人に雇われて働くアイヌの場合，商人側が準備した用具を使うことになるから，否応なしに強いられることになる．おそらくこのような労働の場を通して，シャモ振がアイヌの間に入り込んでいく道筋が想定される．

アイヌ振の荷の負い方――真澄の絵②――

図②は真澄の描くもう一つの荷を負うアイヌの姿図である．寛政 3 年（1791）松前から東蝦夷地の有珠岳まで旅したときの日記『蝦夷廼天布利（えぞのてぶり）』の挿絵で，6 月 4 日のヲシヤマンベ（長万部）に行くまでの次の記事が対応する．

> 河ひとつ渡りて本シラリカに至る．みちすがら雨はふりぬれど，したがひ来つるアキノふたり，笠，あまづつみもさらにせで，
>
> 　　夷人のをどろの髪のそぼぬれてやどるかげなき雨の長浜
>
> ルクチといふ磯に小川あり．こゝをシヤモの詞に黒岩といひて，おほきやかなる岩あり，このはざまごとにキナヲさせり．（『菅江真澄全集』第 2 巻 117 頁）

挿絵に説明文はないが，岩にイナウが立ててあり，二人のアイヌが描かれているので該当箇所と知られる．黒岩のイナウにはここでは立ち入らない．右の人物は髭を蓄えているので成人男子であることは明らかで，弓が描かれないが矢筒のようなものを背負い，左手に図①の人物と同様のものを持っている．左の小柄な人物は女性のように思われるが，あるいは少年（男）なのか決めがたい．背に荷を一つ負うほかに，額から吊るすようにもう一つの袋状のものが描かれている．二人が着ている衣服はアットゥシで，その下部に切伏せ文様のようなものがみられる．この二人が真澄に従ってきたというのであるが，どのような事情で真澄と一緒だったのかは記されていない．

図①との大きな違いは荷の負い方である．図②では二人とも額（前頭部）に紐を当てて荷を支持しているのがわかる．両手で荷紐を押えていないから，重い荷ではないだろう．真澄は図②の負い方が図①のシャモ振と区別されるアイヌ振とはっきりと認識していたに違いない．図②の場面ではないが，真澄は『蝦夷廼天布利』のなかで，アイヌの荷の負い方について言及したところが二箇所ある．

(1)　居ならびたる，このシウランコといふ婦人（メノコ）をみちさきと憑みて，衣包などもたすれば，タアレとて，はちまきの如きものを頭（シヤバ）に引かけて荷の緒として，いとかろげに，ぬかのちからして負ひさいだち，岨路にかけのぼりたゝずみて，チラマンデ・ポロノオカイ・コタンといふは，こゝは羆のいと多処といふ言（イタク）と聞て，あないも，おそれたる色見えて行々境川といふあり（『菅江真澄全集』第 2 巻 109 頁，5 月 30 日，砂原付近）．

(2)　やはらこのコタンのメノコに旅の具ども持すれば，れいのごとく額に負緒をかけて頭（シヤバ）の力つよげに，手を拍ち拍ち，つゆ聞もしらぬ一ふしを鳥などのさへぐやうに，二人のメノコが行々唱（シノチヤ）しつゝムクンヌヰのアヰノの村（コタン）にいたり（同前書 118 頁，6 月 4 日，国縫付近）

どちらも真澄が道案内にアイヌの女性を頼み，衣類など入った旅の荷物を運んでもらったときのことであるが，旅の荷を運んでくれた女性は，額に鉢巻のような荷の緒を引き当てて，額の力で荷を負った様子が記されている．いとも軽そうに，あるいは力強げにと書いているから，女であっても真澄には頼もしく思えたのであろう．熊が出てくるかもしれないという話にアイヌの女性も恐れをなし，また二人のアイヌ女性が手で拍子をとって歌をうたいながら歩いているのに真澄は楽しげであった．シノチヤ（シノッチャ）というのは，日常生活のなかの即興的な性格の叙情歌のことである（谷本一之『アイヌ絵を聴く』北海道大学図書刊行会，2000 年）．真澄はその鉢巻様の荷負い紐の名称を尋ねたのであろう，タアレというのだと記している．

額で荷を負うのは，真澄が（2）で例の如くにと書いているから，しばしば目撃した光景だったのだろう．図②では男性が，(1)（2）の文では女性が額で負っているから，アイヌ民族の間では荷の負い方に性差がなかったことになる．

図①・図②に共通して描かれている手にひっさげているものは何であろうか．簡単に触れておこう．同様の器具は，『蝦夷廼天布利』の他の挿絵にもみられる．「淡婆姑笥二具」と説明文のついている絵があり，また二人のアイヌが互いに飲酒しているところの絵にも何気なくそのものが描かれている．したがって，喫煙具であることは明白だが，煙管差しと煙草入れが紐で繋がれ，煙管を留めておく煙管差しの部分を手に持って歩いていたことになる．

ほぼ同時期の最上徳内の「蝦夷国風俗人情之沙汰」(『日本庶民生活史料集成』第 4 巻，三一書房，1969 年）は，「蝦夷土人，皆草履，草鞋をはかず，蓑笠を不着旅路に赴けどもアツシの単物を着用するのみ．……旅行の道具は，カロフといふて火打道具の提物と弓箭ときせる，煙草入等の物のみなり」(444 頁）と記している．火打ち用具入れをアイヌ語でカロァというが，真澄の図①・図②には腰にその提げ物らしきものがみえないものの（描くのが省かれているか)，徳内の記述は真澄の絵のアイヌの姿を思わせるものがある．いずれにしても，喫煙具がいつも身近にあって，喫煙文化がアイヌ社会に深く根をおろしていた様子を真澄の絵が示しているわけである．

ここでは 2 つの絵を主に取り上げただけだが，真澄の絵は説明文があったり，あるいは本文と一体をなしており，スケッチ風の写生的な絵と文を組み合わせて考察できるメリットがある．そこが絵画作品としての職業的絵師の「アイヌ絵」と違うところである．

アイヌの前頭部運搬を示す史料と絵

次に真澄から離れて，江戸時代に額で重みを支えるアイヌの荷の負い方に着目した文献史料をいくつか紹介してみよう．活字化された若干の史料を少しばかり調べたにすぎないが，荷の運び方に触れているのは，真澄と同じく旅の日記・記録類がほとんどで，異文化として目に留まったという特徴がある．

(3)　夷人男女共人足にいづ．荷物等肩にはかけず，連雀の如き紐を額にあて，荷物をしばりつけ，大勢にてもつなり．荷物は夷人の腰の辺りを地をすりて通るさまをかしき事共なり．メノコは荷物を背負，しばりたる紐を額に当るなり．(『日本庶民生活史料集成』第4巻16頁)

(4)　水もメノコが汲事なり．シントコに水一盃入，是を背に負ひ，家近き川へ行，水を汲み，背負ひ，桶に付たる縄を額へ懸け運ぶ．…小児を負に，肌に付て背中に負，小児の首を襟の所へ出し，イヨマシキといふものにて小児の腰をアツシのチミプの上より押へ，タレといふ平たき紐をメノコの首へかけ，負ひ歩行なり．(同前書501頁)

(5)　蝦夷人，物を背負ふには，れんぢやくを額にあておふ．日本人の胸へかくるをみては，無用心なりとて笑ふといふ．(同前書425頁)

(6)　中土ハ荷ヲ負フニ背ニ負ヒ或ヒハ肩ニ荷ヒケルニ土人ハ夫レト異ナリ，如何ナル大荷ニテモ荷縄ヲ首ヘ引キカケ負フ．山阪ナリ右トモノ次第ニテ何ノ苦モナキ風ニ見ヘタリ．或人土人ニ是ヲ聞シニ万一熊等ニ強奪セラルヽ節ハ荷ヲ外シニ便利ト云フ．京師ニテハ首ノ上ニ挙グルト云フガ是トモ大ニ異ナリ，風俗トハ申ナガラ実ニ稀ナルコトナリ．(『入北記』100頁，北海道出版企画センター，1992年)

(7)　夷人アサカラといふもの，(荷物を)頭に負て浪の中を越に，余及び其外のものども，岩つたひに通りぬ．(『近世紀行文集成』第1巻229頁，葦書房，2002年)

簡単に史料について説明しておくと，(3)は寛政10年(1798)幕府の蝦夷地調査隊に参加した武藤勘蔵の「蝦夷日記」6月13日条，スツツからイソヤにかけての道中でのこと，(4)は寛政4年(1792)の幕府による宗谷場所御救交易の一行に加わった串原正峯「夷諺俗話」の「メノコの事」の項目中の記述，(5)は平秩東作が天明3年(1783)より翌年にかけて松前・江差で見聞したことをまとめた「東遊記」の記事，(6)は仙台藩士玉蟲左太夫が安政4年(1857)に箱館奉行堀利熙に随行して蝦夷地を巡見した際の日記に「土人共荷ヲ負ノコト」として書いているもの，(7)は谷元旦が寛政11年(1799)幕府の蝦夷地巡見隊に図画の役として随行したさいの「蝦夷蓋開日記」6月9日条で，シヤマニからホロイズミに向かったときのことであった．(5)の平秩のみは蝦夷地に旅していないが，そのような荷の負い方を実際にみたのかはわからない．

額を使った荷の運び方は男女の区別なく，蝦夷地のアイヌ民族の間でひろく行われていた様子がわかり，真澄の記述とも一致している．注意しておくべき点をあげておくと，(3)の「荷物をしばりつけ，大勢にてもつ」というのは，一つの重い荷物を複数人が額で支えつつ腰のあたりに載せて運んでいる様子を述べているのであろうか．額に当てる負い紐の名称を(4)がタレと記しているのは，真澄引用(1)のタアレに通じる．そのタレを和人社会にあるもので説明しようとするとき，(3)「連雀」，(5)「れんぢやく」という，肩で背負うさいの紐・綱(連尺・連索)が想起されている．(4)からは水汲みが女性労働となっていることが知られる．シントコはふつう漆塗りの脚つきの行器(ほかい)をさすことが多いが，ここでは桶のことで，二斗入り酒樽の空き樽を使っていると武藤は述べている．水を入れた容器を運ぶときにも額で支えて運び，またアイヌ社会の慣習として重要なのは幼児をおんぶするときにも額を使ったことであろう．

(5)の記述は，なぜアイヌの人々が額で荷を負うのか，その理由が想像できるものとなっている．日本人(和人)が背負い紐を胸にかけるのは，「無用心」だといってアイヌは笑ったという．(6)は

図4 「蝦夷風俗図式」（『蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式』安達美術）

その点についてもっと明確に理由を述べている．「首」とあるのは頭部をさしているが，羆などに突然遭遇したとき，すぐに荷を降ろして安全を確保することができるというのであった．真澄の記述でも，羆に出遭うことをアイヌの人々が非常に恐れていた．そのような危険への対処が急な坂道などでも額で背負うことを一途なものとし，文化規範化していたことが知られる．そのようなアイヌの認識からすると，和人のように背や肩で荷物を負うのはいかにも無用心に思えたに違いない．玉蟲は京都辺の頭上運搬の知識を知っていて，それとも異なる稀な風俗という受け止めかたであった．(7) は引用するほどの記事ではないかもしれないが，同じく谷元旦の「蝦夷風俗図式」(『蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式』安達美術，1991 年）に荷を運ぶアイヌ男性の姿が描かれ，煙管差し（煙草入れ）を手に持ち，マキリ（小刀）を腰にさし，荷物の負い紐を額に当てている（図④）．その説明文に「夷人負物皆従背繋於額無負於肩者」と記し，アイヌはみな額を使い，肩で負う者はいないと説明している．

文献史料に書かれるアイヌの荷の負い方は，注意深くみていかないと見落としそうであるが，博物館等の企画展・特別展の図録に掲載された絵画作品をみていると，額で荷を背負うアイヌの姿を描いた図柄を頻繁に目にする．おそらくそうした絵によって，アイヌの運搬法が見る者に印象づけられ，比較的よく知られているのかもしれない．いちいち図版をあげないが，『描かれた近世アイヌの風俗』（アイヌ民族博物館，1994 年）の掲載絵画では，子供を負う母親の場合も含めて，千島春里「アイヌ人物図」「蝦夷人鹿狩之図」，平沢屏山「蝦夷人昆布採取図」，木村巴江「蝦夷神祭之図」「昆布取之図」，小玉貞良「蝦夷国風図絵」にその例を見出すことができる．

また，『アイヌの四季と生活――十勝アイヌと絵師・平沢屏山――』（十勝毎日新聞社，1999 年）をみると，平沢屏山は好んで額で荷を運ぶ光景を画題にしていたようにさえ思われる．その代表的な作品「蝦夷風俗十二ケ月図」のうち，正月年礼の図，三月布海苔採り図，八月サケ猟図，九月マレㇰ漁図，十月出猟図に額を使って運ぶ姿が描かれている．他にも天理大学附属天理図書館所蔵の屏山の「母子図」「弓猟図」「水運びの図」「出猟図」などにも同様の運搬法がみられる．アイヌ風俗を描くとき，絵師にとって額で荷を負う姿はアイヌの異民族性を標徴する格好の情景の一つであったことを示している．

真澄の図②に描かれた額で荷を負うアイヌの運び方はこのように同時代の文献や絵画によっても裏づけられるが，それだけに史資料が限られるわけではない．アイヌ語でタㇲと呼ばれる背負い縄が明治以降の収集品として残されており，それらの写真図版も提供されるようになった（『東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料篇』東京美術，1992 年．『馬場・児玉コレクションにみる北の民アイヌの世界』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構，2000 年，など）．

民具に関しては萱野茂『アイヌの民具』（すずさわ書店，1978 年）が名称，形状，使用法など詳しい情報を与えてくれる．それによれば，タㇲ（背負い縄）はシナの木の皮などで編んだもので，額に当てる部分をタリペと呼んで幅広くつくるのだという．そして，アイヌが額で背負う理由について，「突然熊に出会っても首をうしろへひと振りするだけで背中の荷物をうしろへ落とし，即座に身軽になれる」，そうすれば「手に残った弓矢や槍で熊と戦うことも，身をひるがえして逃げることもでき

る」（125 頁）と述べている．なぜ，アイヌの人々が和人との接触のなかで，和人振の荷の負い方に容易に移行せず，額で背負うことに執着してきたか，前述した史料（5）（6）に記されるアイヌの認識を裏付けるものとなっている．その他，民族誌・民俗調査報告書などによって，伝統的な運搬具・運搬方法に関するアイヌ側からの証言が得られる．

図 5 「三国通覧図説」（『新編林子平全集』2，第一書房）

おわりに――列島史のなかで――

さて，額を使う運搬法は「頭背負い」「前頭部運搬」「前頭部支持背負運搬」などと名づけられ，頭上に荷を載せて運ぶ方法とともに頭部運搬に括られていることが多い．日本列島における前頭部運搬は，これまでの民具・民俗研究によると，南西諸島の一部（奄美大島・沖縄本島中北部など），伊豆七島，および北海道のアイヌに限って報告されている（上江洲均『沖縄の暮らしと民具』慶友社，1982 年．木下忠編『背負う・担ぐ・かべる』岩崎美術社，1989 年，など）．とくに南西諸島の事例調査を通して運搬史における位置づけが論じられてきた．

須藤功は司馬江漢『江漢西遊日記』に静岡県天竜市熊での記載があると指摘しているが（「アイヌの前頭部支持運搬」『技術と民俗』上 308 頁，小学館，1985 年），それを除けば本州・四国・九州においては江戸時代，およびそれ以前の前頭部支持運搬を示す史資料はいまのところ知られていない．頭上運搬の場合には，絵巻物などから本州でも中世に遡って顕著に確認できるのと様相は大いに異なっている．前頭部を使った運搬法が列島の北と南に存在してきたことはどのような歴史的経緯を意味しているのであろうか．

頭上運搬は一般に古いかたちの運搬法で，頭上運搬から両肩背負運搬へ移行していくと考えられている．前頭部運搬はいわばその中間様式という理解になろうか（田原久「伊豆七島の頭上運搬」，前掲『技術と民俗』上 630 頁）．もしそのような仮説が成り立つとすれば，前頭部支持運搬が江戸時代には少なくとも支配的であったアイヌ民族の場合に，その前史としての頭上運搬の痕跡を見出すことができてもよい．

そのような視点でみていくと，信憑性を問わなくてはならないが，林子平の「三国通覧図説」の付図に「下品女夷鮭魚ヲ負テ運送スル躰」を示した絵（図⑤）が気になる（『新編林子平全集』2，53 頁，第一書房，1979 年）．菰のようなもので包んだサケを前頭部に懸けた紐によって負っているのは問題ない．それとは別に，頭上に被り物か敷物のようなものがあり，その上に何かを入れた容器が載せられ，それを左手で押さえながら，右手に子供を引き連れて歩いている様子が描かれている．頭上運搬がアイヌにも存在したかのように思わせてしまうが，その真偽は今後の課題としておきたい．

（COE 共同研究員）